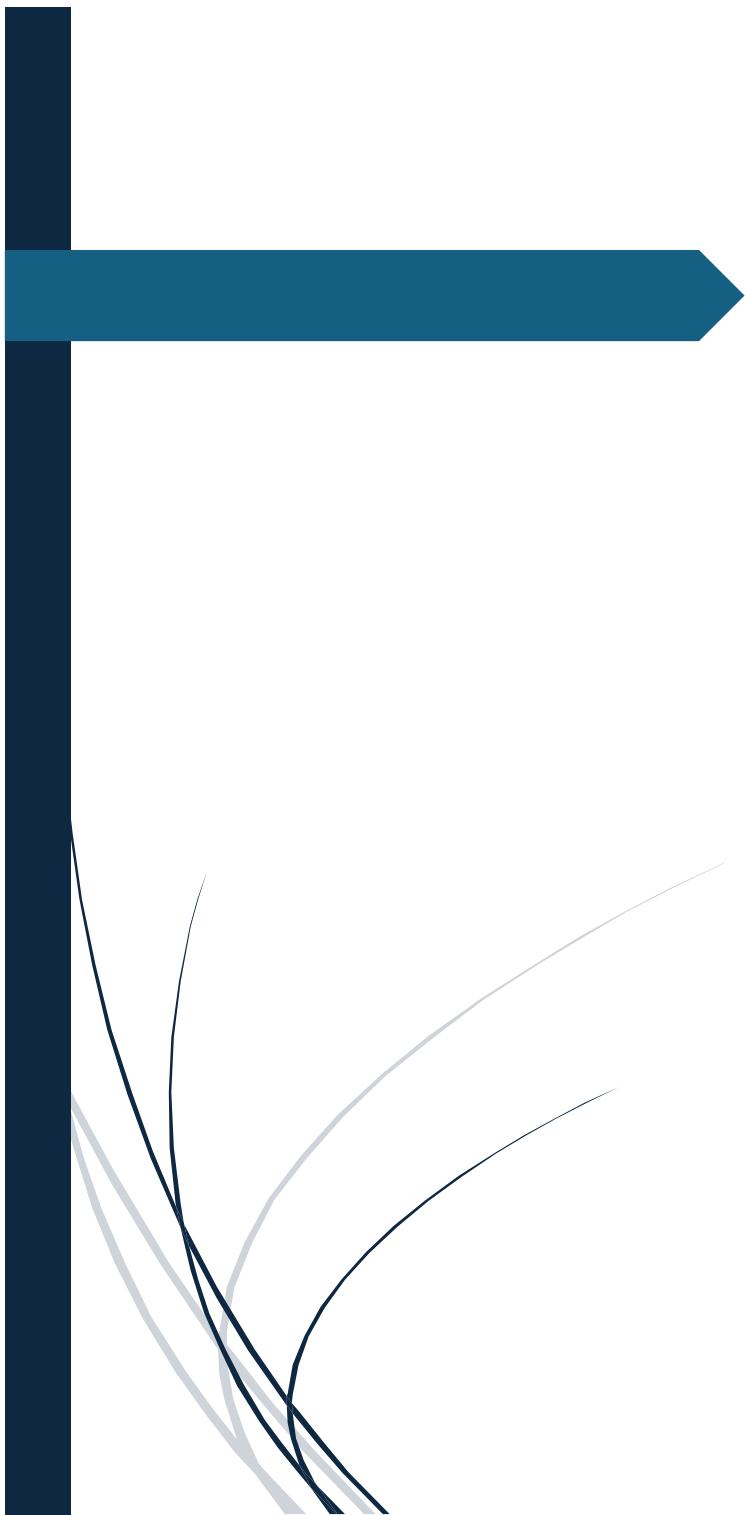




＊作品の著作権は作者に帰属します。無断の上演・掲載・引用・配布等固くお断り申し上げます。
＊今後の改稿を目指す進行中の戯曲であることをご了承のうえお読みください。

【登場人物】

- ・小幡千尋(おばた ちひろ)・・・30歳。面接官
- ・志村涼子(しむら りょうこ)・・・29歳。画家の夢をあきらめ、仕事を探している。
- ・神田伸大(かんだ のぶひろ)・・・45歳。小幡の直属の上司。
- ・佐伯一(さえき はじめ)・・・30歳。志村と同じ求職者。

【あらすじ】

画家の夢を諦めた志村涼子。
長年、制作活動を優先してきたため職歴はアルバイトばかり。再就職に挑むも、不採用通知ばかりが積み重なっていく。
そんな折、かつての月だけ働いたコールセンターの求人を見つけ、最後の望みをかけて応募を決意する。しかし、“一年・正社員勤務”と履歴書に嘘を記して――。

だが、嘘を抱えていたのは彼女だけではなかった。新たな職場で数々の欺瞞を目撃する。
「再スタート」を願って足を踏み入れた場所で、志村が最後に選んだ行動は、誰も予想しなかったものだった。

【台本上での記号のルール】

(AAA)・・・人物の動きを示している
〈AAA〉・・・次の人物のセリフに遮られる、前の人物のセリフをさえぎって喋る場合を示している

「AAA」・・・人物が省略した言葉を示している。

【舞台】

舞台はある企業の小会議室。

舞台中央に、大型の長方形のテーブルが配置されている。4人が作業できる程度の大きさ。テーブルの周りには、上手下手に2つずつ椅子が配置されている。テーブルの中央には固定電話が配置されており、内線で上階のオフィスにいる社員との連絡ができる。

舞台奥中央にホワイトボードが配置されている。

下手奥側に、ドアがあり、エレベーターホール・トイレへと通じている。この会議室の唯一の出入り口である。

舞台前面上手に、窓がある。

【一場】

2025年5月23日金曜日午前11過ぎ。

会議室には2名の人物がいる。

下手側の椅子に着席しているのは面接官である小幡千尋。

上手側の椅子に着席しているのは、求職者である志村涼子。

上手側の志村が着席していない椅子には、求職者の佐伯一の荷物が置かれている。面接前の会社概要の説明を小幡が行っている。手元には会社の冊子。

小幡「以上で、会社概要の説明は終わりかな。」

志村「ありがとうございます。」

小幡「で、このあと担当者が来て、応募条件の確認をして、面接という流れね。」

志村「はい。」

小幡「なんだけど、担当者がまだきてなくて。」

志村「ああ、はい。」

小幡「先に、履歴書もらっちゃおうかな。」

志村「あ、わかりました。」

志村、カバンの中の履歴書を探す。

鞆から取り出し、小幡に渡そうとすると手で手が止まる。

小幡「志村さん？大丈夫？」

志村「・・・手が固まってしまいました。」

小幡「え？手が固まる？それ大丈夫なの？」

志村「あ、はい。すいません。今動きました。」

手を動かして、小幡に履歴書を渡そうとする。

寸でのところで、内線が鳴る。

小幡「ああ、ごめん。（内線が出る）はい、小幡です。え？いやいや、それ話が違うじゃないですか？無理って・・・いやいや。」

志村「・・・」

小幡「ちょっと待ってくださいよ。いや、行きますから。そっち。（内線を切る）志村さん、ごめん。ちょっと待っててくれる？」

志村「あ、はい。」

小幡「その冊子の裏に今回の業務条件載ってるから、見といてくれる？」

志村「はい。」

小幡、下手より退場。

志村、今渡そうとした履歴書を見つめる。
ため息をつく。

その後、カバンからもう一枚の履歴書を出して、見比べる。
葛藤したのち、最初に渡そうとした履歴書を鞆にしまい、新しく出した履歴書を机に残す。
後ろめたいことがあるのか、胸に手をやり呼吸を整える。
気を取り直して、冊子の裏の業務条件を確認する。

志村「・・・？」

志村、スマホを取り出して応募時にみた勤務条件を確認する。
スマホと冊子を何度も見比べる。

勤務条件が求人サイトで見たものとは微妙に違うことに気が付く。
その瞬間、頭痛が襲う。

志村「いた・・・」

志村、顔をしかめて頭を押さえる。
あまたを振りかぶって、頭痛を抑える。
顔を手でたたき、気持ちを入れ替える。

佐伯一、下手より入場。

志村、面接官が来たと思って、立ち上がる。

佐伯「あれ？」

志村「なんだ、あなたか。」

佐伯「誰か来たんですか？」

志村「ああ、社員の人が。今説明うけてたところ。」

佐伯「ええ？僕いないのに？」

志村「勝手に出てっちゃうからでしょ？」

佐伯「しょうがないじゃないですか。結構待たされたんだから。トイレ我慢できなくなって
も。」

志村、席に着く。

佐伯、自身の荷物がある席に向かう。

佐伯、志村の履歴書を見る。

佐伯「結局そっちにしたんですね。」

志村「いいでしょ。」

佐伯「いいんですよ、みんなやってるんですから。」

志村「(佐伯の軽薄さのため息をつく)・・・あ、それより、これ見てくれる？(求人条件を見せる。)」

佐伯「なんですか？」

志村「これさ、〈募集のやつと違うよね？〉」

志村のセリフが言い終わる前に、小幡が下手より入場。

小幡「お待たせー。あ、佐伯さんですね。」

佐伯「はい。」

小幡「お待たせして申し訳ありませんでした。」

佐伯「いえ。」

小幡「佐伯さんは、別室で面接を行いますので荷物まとめてもらえます？」

佐伯「はい。」

佐伯、荷物をまとめる。

下手より、神田が入ってくる。

神田「失礼します。」

小幡「佐伯さん、(神田の方に手をかざして)面接を担当する神田です。」

佐伯「はい。あれ？」

神田「あ。」

佐伯と神田、お互いに見つめあう。

小幡、二人の顔を交互に見る。

小幡「神田さん？」

神田「ああ、ごめんごめん。神田伸大と申します。面接を担当させていただきます。」

佐伯「はい、佐伯一と申します。よろしく願います。」

神田「では、行きましょうか。」

佐伯「はい。」

神田と佐伯、下手より退場。

小幡「で、志村さんの面接なんですけど私がやることになったから。」

志村「あ、そうなんですか。」

小幡「不本意だけどね。」

志村「ああ。(なんと言っているのかわからず、あいまいなアクション。)」

小幡「じゃあ、履歴書もらっている？」

志村「はい。」

志村、履歴書を小幡に渡す。

小幡「ありがとう。(ざっと目を通して)じゃあ、面接始めるね。」

志村「はい。」

小幡「・・・まず確認したいのは、(履歴書の勤務希望の欄を見ながら、)週5勤務でいいのかな？」

志村「はい。週5勤務を希望しております。」

小幡「いいね。勤務時間はどれくらいが希望？」

志村「そうですね。フルタイムで考えております。」

小幡「ほんと！助かるわー。それ。希望の曜日とかある？」

志村「はい。金土日月火、で週5を。」

小幡「それ、最高！」

志村「はい？」

小幡「金土日が、人がいないのよ。いや、ものすごい助かる。それ。」

志村「あ、ありがとうございます。」

小幡「志村さん、コールセンターの経験は？」

志村「あります。」

小幡「はい、ありがとうございます。えと、コールセンターはこの会社かな(指で指して)？」

志村「そうですね。」

小幡「こちらは正社員で1年間勤務していたということで、間違いない？」

志村「・・・」

小幡「ん？」

志村「はい、間違いないです。」

小幡「それは、心強いね。ちなみに、具体的な業務内容は(志村が顔をゆがめていることに気付き)・・・志村さん？」

志村「(頭痛が襲う)・・・」

小幡「大丈夫？」

志村「あ、すいません。最近、風邪をひいて。もう治ったんですけど。頭痛だけまだ残っています。」

小幡「そうなの？え、面接続けられる？」

志村「あ、それは大丈夫です。ものすごい痛いわけではないので。」

小幡「そっか。無理しないでね。」

志村「ありがとうございます。」

小幡「あ、で、具体的な業務内容は？」

志村「あ、はい。そちらの会社では、健康食品の受注窓口の電話業務をやっていました。」

小幡「うんうん。今回の業務と近くていいね。」

志村「そうですね。」

小幡「正社員で働いてたからあると思うんだけど、リーダー業務やSVなどは経験してる？」

志村「・・・リーダー業務はあります。」

小幡「ほんと？いやめちゃくちゃいい。あ、ていうのもね。うち今回、オペレーターで募集してるけど、ゆくゆくはリーダー業務を担う人を探してたのよ。」

志村「あ、そうなんですね」

小幡「うん。志村さん、しっかり経験があるので期待の星だわ。」

志村「ありがとうございます。」

小幡「(履歴書に目を通して)あーでも、気になるのは、一年でコールセンターの仕事をやめてるのと、以降の仕事はすべてアルバイト、だよな？」

志村「そうですね。」

小幡「ふむふむ。まあそのあたりも含めて、今回応募してきた理由を聞かせてもらえるかな？」

志村「あ、はい。・・・私は再スタートを切るために御社を志望しております。」

小幡「再スタート？」

志村「はい。一年でコールセンターの仕事をやめたのは、就職であきらめた画家の夢をかなえるためです。」

小幡「画家「を」目指してたんだ。」

志村「はい。そのため、時間の融通がつくアルバイトを選択しておりました。」

小幡「ふーん。今回の雇用形態もアルバイトだけど、まだ画家の夢を追いかけてる感じ？」

志村「いえ。それはもう。挑戦できることは挑戦したので、再スタートを切りたくて、御社で働きたいと思っております。」

小幡「あれかな？正社員登用制度を見た感じかな？」

志村「あ、そうですね。まずはアルバイトから経験を積んで、いずれは正社員を目指したいと思っております。」

小幡「うん。うちは大歓迎だし、アルバイトで入って、の人も多いから。」

志村「はい。」

小幡「後聞きたいのはね、・・・志村さんからなにか聞きたいことある？」

志村「あ、そうですね。これなんですけど。(先ほどの冊子を小幡の前に出す。)」

小幡「はいはい。」

志村「この労働条件なんですけど、これは間違いですよ？」

小幡「え？」

志村「はい。これ、〆時から19時で実働8時間って書いてあるんですけど、求人であれで見たときは、9時から18時って書いてあったと思うんですけど。これは？」

小幡「あー、それね。」

志村「はい。」

小幡「あー、そうだね。そうなんだよ。そうなの。」

志村「え？」

小幡「あ、え、ごめんなさいね。あの、うん。ごめんなさい。志村さんがみた求人サイトの時間が、たぶんだけど前に募集してた時のままになっちゃってるのかも。」

志村「ええ？」

小幡「あー、そうだよ。ごめんなさいね。あの、うん。だから、今回募集してるのは〆時から16時で、実働8時間。9時から18時は、もう今埋まっちゃって。」

志村「あー、そうなんです。」

小幡「ごめんなさいね。うっかりしてた。ごめんなさい、本当に。その時間でも大丈夫？」

志村「あー、まあ、はい。朝は得意なんで。」

小幡「ほんと。ありがとう。じゃあ、次の〈質問に移ろうかな。〉」

志村「〈遮って〉もう一個いいですか？」

小幡「なに？」

志村「仕事内容なんですけど。求人サイトで拝見した時は、化粧品の実注窓口の業務と書いてあったと思うんです。」

小幡「うん」

志村「でも、この資料には、実注窓口、カスタマーサービス、忘れ物センターって。ええ？これは、私に関係ない業務ですか？」

小幡「あー。いや。そうなのよ。」

志村「はい？」

小幡「実注窓口を経験してもらって、それをマスターしてもらったら、他の案件も担当してもらうことになるの。」

志村「他の案件？」

小幡「そうなの。いろんなクライアントがいるから、いろんな案件があるのよ。」

志村「あー、一個の電話業務だけじゃないってことですね。」

小幡「そうそう。で、全部受けれるようになったら、時給1500円になるの。」

志村「ええ？全部受けれるようになったら？」

小幡「うん、そう。なんか、おかしい？」

志村「え、だって、求人サイトでは、研修中の〆か月は時給1200円で、研修が終わったら

1500 円って。ええ?」

小幡「あ、えと、そうかな。そんな、研修 〇 か月、なんて書いてあった?それはないと思うんだけど。」

志村「いや、書いてはないですけど。研修中、時給 1200 円、かっこ 〇 か月、って書いてあったと思うんですけど。」

小幡「あー、なるほどね。それ、みんな結構勘違いするのよね。」

志村「勘違い?」

小幡「えとね、時給 1200 円かっこ 〇 か月、じゃなくて、かっこ 〇 か月びよーん(手で〃を描く。)、だから。」

志村「え?なんですか、びよーんって。」

小幡「これ、これ、(〃)。何々から、かな。」

志村「・・・あ、ゝってことですね。」

小幡「そうそう。だから、〇 か月から、〇 か月じゃなくて、最低 〇 か月かかりますよって意味なんだけど。」

志村「えー、あ。そうなんだ。」

小幡「そうだよね。そうそう、それも直そうと思ってたんだけどね。ごめんなさいね。」

志村「あー、はい。」

小幡「大丈夫?」

志村「まあ、あの、大丈夫です。」

小幡「ごめんね、なんかだましたみたいになっちゃって。」

志村「・・・」